

論文審査の結果の要旨

氏名：市 島 諒 二

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：Efficacy of Full-Spectrum Endoscopy to Visualize the Major Duodenal Papilla in Patients with Familial Adenomatous Polyposis

(FUSE(full-spectrum endoscopy)を用いた家族性大腸腺腫症患者における十二指腸乳頭視認性に関する効果)

審査委員：(主 査) 教授 山 下 裕 玄

(副 査) 教授 石 井 敬 基 教授 増 田 しのぶ

教授 森 山 光 彦

審査の概要

家族性大腸腺腫症 (familial adenomatous polyposis, FAP) 患者は、一般集団と比較して十二指腸癌のリスク比が極めて高い。FAP 患者では十二指腸腺腫の存在も十二指腸癌のリスクであり、十二指腸腫瘍の検索は同疾患患者の outcome 改善に重要である。しかしながら、通常の上部消化管内視鏡検査では、十二指腸の視認性は視野角と操作性の問題から不十分である。

FUSE (full-spectrum endoscopy)は、前面と左側面の両方にカメラが設置された内視鏡で、245 度まで視野角を拡げることが出来る。市島氏は、FAP 患者を対象に、FUSE による十二指腸乳頭の視認性改善効果を検討した。乳頭の視認性は 5 段階評価で (Type1,乳頭全てを観察可; Type2,開口部を含む乳頭口側が観察可; Type3,開口部を含まない乳頭口側が観察可; Type4,開口部を含む乳頭肛門側が観察可; Type5,乳頭が観察不可)、on-site で内視鏡医による評価、続いて off-site で 3 名の医師により内視鏡画像の評価が行われた。

対象は 49 例の FAP 患者で、on-site での評価は、従来の内視鏡では Type1 32.6%, Type2-4 38.8%, Type5 28.6%であったのに対して、FUSE では Type1 100%であった。Off-site の評価では、Type1/Type2-4/Type5 の順に、従来の内視鏡画像では評価者 A (8.2%/63.2%/28.6%)、評価者 B (16.3%/53.1%/30.6%)、評価者 C (14.3%/55.1%/30.6%)であったのに対し、FUSE 画像では評価者 A (100%/0%/0%)、評価者 B (98%/2%/0%)、評価者 C (100%/0%/0%)と視認性の明らかな改善があった。本研究の対象患者の中で、乳頭の腫瘍性病変は 12 例 (24.5%) で認められ、4 例では FUSE で新規に指摘されたものである。

本研究は *Digestion* 2020;101:563-570 に掲載済である。FUSE による十二指腸乳頭の視認性改善から、FAP 患者の十二指腸スクリーニングには視野角の広い内視鏡が推奨できるとの結論し、臨床的に意義のある研究と評価できる。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

令和 4 年 2 月 24 日